



律族
 書及
 法
 治罪法草案

刑部
 司
 法
 課

刑部
 司
 法
 課

6558



6558

刑部

埃及法

治罪法草案

第一

箕作權大内史 澤

昭和九年五月三日
鶴田乙丑 贈

其罪大者之

法律及治罪法草案目次

○第一卷 至第一百三十條

○第一章 總規則

○第二章 司法警察

○第三章 下吟味ヲ求ムル事及々刑事

○ノ訴訟

○第四章 犯罪告訴及々民事原告ノ事

○第五章 下吟味ノ事及々下吟味掛リ

○第六章 裁判役ノ事

○第七章 証物ノ事

○第八章 証人ノ事

○第九章 犯罪被告人ニ對スル預防ノ

○第十章 犯罪被告人ニ對スル預防ノ

処置

○第八章 下吟味ノ終ル事及ヒ被告人

ヲ相當ノ裁判所ニ移ス事

○第二卷 自第百三十七條 第七條 裁判所

○第一章 註誤裁判所

○第二章 懲治罪裁判所

○第三章 重罪裁判所

○第一款 陪審

○第二款 裁判席ヲ開ク前ノ手續

○第三款 重罪裁判所ノ裁判席雙方

○論辨裁判言渡ノ事

○第四款 重罪裁判所ノ言渡ヲ取消

ス日及ヒ其言渡ノ如ク執行ノ事

○第五款 重罪裁判所ニ於テ被告人

ニ抗辯ノ依テ言渡ス事

○第四章 各種ノ刑法裁判所ニ通スル

規則

○第五章 期滿免除ノ事

○第五條 重罪案件之...

埃及法律 治罪法草案

第一章 預先治罪

第一條 總規則

第一條 重罪輕罪注誤 = 付キ法律上 = 定ムル

刑罰ハ管轄裁判官兼言渡アル其非ヤレハ之

適用ス可カラズ

第二條 犯人ヲ刑ニ知セント求ムル

檢察官ニ非ヤレハ之ヲ為ス可カラス

第三條 輕重罪ハ下吟味又ハ注誤罪ハ下吟味

ハ檢察官又ハ民事原告人ヨリ之ヲ求ムル

得ヘシ但シ控訴裁判所ヨリ其公務ヲ以テ

下吟味ヲ為ス可キ旨ヲ言渡ス場合又ハ現行

ノ罪犯ヲ知テ下吟味掛裁判役自カテ其公務

司法警察官法
第ニ章 司法警察官
第ニ条 司法警察官は、
第ニ章 司法警察官
第ニ条 司法警察官は、
第ニ章 司法警察官
第ニ条 司法警察官は、
第ニ章 司法警察官
第ニ条 司法警察官は、
第ニ章 司法警察官
第ニ条 司法警察官は、

鎮守 警務局長
第ニ章 司法警察官
第ニ条 司法警察官は、
第ニ章 司法警察官
第ニ条 司法警察官は、
第ニ章 司法警察官
第ニ条 司法警察官は、
第ニ章 司法警察官
第ニ条 司法警察官は、
第ニ章 司法警察官
第ニ条 司法警察官は、

若所在地ノ管轄スル裁判所ノ檢察官ニ早
速其旨ヲ報告ス可シ

第八條 何人ニ限ラス公ケル者ハ檢察官ニ之ヲ
害スル重罪ヲ目撃シタル者ハ檢察官ニ之ヲ
報告ス可シ

又現行罪犯ノ場合又ハ現行罪犯ト曰ヒキ景
況ノ場合ニ於テ預防ノ為メ犯人ヲ逮捕シ得
可キ時ハ之ヲ捕ヘテ檢察官ノ長ニ引渡シ又
ハ公ケル兵カヲ預カレ者ニ引渡ス可シ但シ
之レカ為メ特ニ逮捕ノ命令書ヲ得ルヲ要セ
ス

第九條 司法警察官吏ハ其管轄地内ニ於テ行
フ知ル重罪軽罪註誤罪犯申立ヲ受ケ其裁判

ヲ求ムル為メ裁判所ノ檢察官ニ其申立昏ヲ
出ス可シ

第十條 司法警察官吏及シ其下役皆其申立ヲ
受ケシ諸罪犯又ハ其他ノ方法ニテ知得シタ
ル諸罪犯ノ下吟味ヲ容易ナラシム可キ筈テ
ノ模様ヲ探索シ並ニ送テル迄抑テ取調ヘ且
其証拠ヲ分明ナラシムル為メ保全ノ所置ラ
為シ此等ノ諸吏ヲ調昏シ犯人ニ諸証昏奏ト
共ニ之ヲ檢察官ニ出ス可シ

第十一條 檢察官ノ外ノ司法警察官吏ハ下吟
味抑テ裁判役ヨリノ委任ニ因リ下吟味ニ取
扱ルヲ得可シ但シ其委任ヲ受ケシ權限外
ニ及ハズ之レヲ為ス可カラズ

第十二条 然レモ現行罪犯ノ場合ニ於テハ檢察官及ク其他ノ司法警察官吏直ニ最初ノ下吟味ニ取扱レルヲ得可シ

第十三条 現行ノ所ノ罪犯又ハ即今行ヒ終リタル罪犯ヲ現行ノ罪犯ト云ヒ又衆人ニ罪犯ヲ高声ニ呼ヒ追ハレ或ハ被告人犯罪ノ時ヨリ伺モテク兵器、器具、物件昏萎ヲ携ヘタルニ因リ之ヲ其罪犯ノ主又ハ従ナリト思料ス可キ時ハ亦現行ノ罪犯ト云フ

第十四条 現行罪犯ノ場合ニ於テハ司法警察官吏早速其^場所ニ至リ必要ナル調査ヲ記シ且犯罪ノ了リシト其模様ト場所ノ景状トヲ記シ其場所ニ居合ハセシ者ヲ申立テ聽キ又

ハ其罪犯ノ復突ト其本人トニ付テ告知ヲ為ス可キ者ノ申立テ聽ク可シ

第十五条 司法警察官吏ハ其場所ニ居合ハセシ者ニ其調査ヲ記シ終ル時ニ至ル迄其場ヲ去ルヲ禁シ且罪犯ノ復突ニ付テ告知ヲ為ス可キ者ヲ即刻呼出スルヲ得可シ

第十六条 前条ニ記スル制禁ヲ犯ス者アリ又ハ呼出テ受テ出席スルヲ背セサル者アル時ハ司法警察官吏此等ノ旨ヲ調査ニ記ス可シ

第十七条 前条ニ記スル犯人ハ裁判所ニ於テ右調査ヲ志ト為シテ二十日アストルヨリサナカラズ百日アストルヨリ多カラズ罰金ヲ言渡サレ且二十四時ヨリサナカラス一週ヨ

リマカラナル時間禁錮ノ刑ニ処セラル可シ
第十八条 現行罪犯ノ場合ニ於テ重罪又ハ竊
盜詭騙暴行等ノ罪ヲ犯シ或ハ犯サント試ミ
為シタルヲ思料ス可キ時又ハ犯罪被告人埃
及ニ於テ人ノ知りタル定マリシ住所アラサ
ル時ハ司法警察官吏其犯罪ノ重キ懲憑アル
被告人ヲ捕ヘシテ其弁解ヲ聴キタル上ニ十
四時内ニ之ヲ管轄裁判所ニ送り其検査局ニ
引渡ス可シ但シ檢察官ハ二十四時内ニ下吟
味撰り裁判役ヲシテ之ヲ問訊セシム可シ
第十九条 司法警察官吏ハ前条ノ場合ニ於テ
被告人其場ニ在ラサレハ引出状ヲ出シテ其
旨ヲ調査ニ記ス可シ

第二十条 引出状ハ使吏又ハ公ケノ兵カラ預
カレ者ニ之ヲ渡ス可シ
第二十一条 現行罪犯ノ場合ニ於テハ司法警
察官吏司法職制法ニ定ムル規則ニ循ヒ被告
人ノ住所ヲ穿鑿シ兵器器具及ヒ其他何品ニ
限ラス罪犯ノ行フニ用五リ可キ物件或ハ夏
実ヲ分明ナラシム可キ物件アラハ之ヲ取上
ク可シ
第二十二条 又被告人ノ住所ニ於テ見出シタ
ル昏物モ亦前条ニ記スル所ト同シク之ヲ取
上ク可シ
第二十三条 取上ケタル物件ハ之ヲ蓋ヒ又ハ
封印ヲ為シテ之ヲ束子其封印ノ下ニ在ル一

片ノ紙ニ其取上ケル調卷ヲ日附ト其取上ケ
ヲ為ス事柄ノ日附トヲ記ス可シ

第二十四条 司法警察官吏ハ鑑定人又ハ医師
ノ助ケヲ得テ各其職業ニ管スル事柄ニ付テ
申立昏ヲ出ス可キ旨ヲ要ス可シ但シ其鑑定
人又ハ医師ハ本心ニ背カス其説ヲ申立テ可
キノ誓ヲ為ス可シ

第二十五条 檢察官現行罪犯ノ場合ニ於テ司
法警察官吏ノ既ニ取捕リシ下吟味ニ関涉ス
ル時ハ司法警察官吏ニ代テ其下吟味ヲ為ス
又ハ其官吏ニ継続シテ之ヲ為スヘキトテ許
ルス可シ

第二十六条 又檢察官自カラ其下吟味ニ為ス

時ハ司法警察官吏ニ其手續ノ一部ヲ為ス可
キトテ任スルヲ得可シ

第二十七条 如何ナル場合ニ於テモ司法警察
官吏現行罪犯ノ下吟味ヲ為スタメ其場所ニ
至ル時ハ檢察官ニ其旨ヲ報告ス可シ

第二十八条 檢察官ハ早速其旨ヲ下吟味裁
裁判役ニ報告ス可シ

第二十九条 司法警察官吏並ニ現行罪犯ノ場
合ニ於テ処置ヲ為ス檢察官ハ下吟味裁
判役ノ未キ下否其下吟味ノ手續ヲ其裁判役
ニ任カス可シ但シ下吟味裁
判役ハ檢察官ニ既ニ其取
捕リシ訴訟手續ヲ継続シテ取行フヲ許ルニ

又ハ時ニ下吟味ノ手續中其箇條ヲ定メテ之
ヲ任カスヲ得可シ

第三十條 司法警察官吏現行ノ犯人ヲ取押ヘ
又ハ他ノ官吏ノ名代トナリテ犯人ヲ取押フ
ル時ハ直チニ公ケノ兵ヲ借ラント求ムル
ト得可シ

第三章 下吟味ヲ求ムル及ヒ刑事
ノ訴訟

第三十一條 現行罪犯ノ場合ニ於ケル下吟味
ノ調査ハ司法警察官吏邊滞ナリ之ヲ其管轄
裁判所ノ検事局ニ出シ檢察官ハ直チニ其調
査ヲ取調ヘタル上總テハ各委テ下吟味ヲ求
ムル各ト共ニ下吟味掛リ裁判役ニ出ス可シ

第三十二條 又司法警察官吏ハ其受取リタル
犯罪ノ申立各及ヒ諸罪犯ヲ証ニ或ハ之ヲ取
調ヘタル調査ヲ邊滞ナリ検事局ニ出ス可シ

第三十三條 又檢察官ハ前條ニ記シタル犯罪
ノ申立各及ヒ調査ヲ受取リタル上又ハ其他
ノ方法ニテ犯罪ヲ知りタル上ニテ下吟味掛
リ裁判役ニ此等ノ各委テ出シ且下吟味ヲ求
ムル各ヲ出ス可シ

第三十四條 檢察官ハ控罪又ハ違誤ノ復ニ付
キ犯罪被告人ヲ拘留セラレサル時ハ直チニ
管轄ノ裁判所ニ訴ヘ被告人ヲ其裁判所ニ呼
出ス丁ヲ得可シ

第三十五條 檢察官ハ其別段取調ト手續ヲ為ス

ニ及ハスト思フ犯罪申立昏及ニ犯罪ヲ認ス
ル調各ノ目録ヲ毎週検事長ノ手ヲ経テ控訴
裁判所ニ出ス可シ

第三十六條 控訴裁判所ニ於テハ此等ノ犯罪
申立昏及ニ犯罪ヲ認スル調各ノ目録ヲ見タ
ル上又ハ其他ノ方法ヲ以テ犯罪ヲ知リタル
上諸昏委ノ寫ヲ出サシメ又ハ犯罪ノ下吟味
ヲ為ス可キトテ其公務ヲ以テ言渡ストテ得
可シ但シ其下吟味ハ檢査長又ハ其代役ノ求メ
ニ因リ相当ノ下吟味掛リ裁判役遲滞ナク之
ヲ為ス可シ○檢査長ハ控訴裁判所ノ命ニ應
ジテ下吟味ノ模様ヲ申立ツ可シ

第四章 犯罪告知及ニ民事原告ノ事

第三十七條 民事原告人ニ非ナル者ヨリノ犯
罪告知状登之ヲ通常ノ犯罪申立昏ナリト着
做ス可シ

第三十八條 民事原告人タルヲ自カラ述ヘシ
者ヨリノ犯罪告知状ハ裁判所ノ昏記局又ハ
下吟味掛リ裁判役又昏記局又ハ檢事局ニ之
ヲ出シ或ハ直チニ下吟味掛リ裁判役ニ出ス
可シ

第三十九條 下吟味掛リ裁判役檢査官ノ手ヲ
経テ右犯罪告知状ヲ受取ラレ時ハ遲滞ナ
ク之ヲ檢査官ニ示ス可シ
第四十條 下吟味掛リ裁判役右告知状ヲ檢査
官ニ示セシ後其告知ヲ管理シテ下吟味ニ取

捕ル可シ但シ換事局ヨリ別段下吟味ヲ求メ
ナル時ト虽モ亦日一ナリトス

第四十一条 控罪及口誣誤ノ場合ニ於テハ民
事原告人直ニ被告人ヲ管轄裁判所ニ呼出
シ其裁判席ヲ廻クテ三日前ニ諸唇ヲ檢査
局ニ出ス可シ

第四十二条 民事原告人ハ裁判所々在ノ地ニ
住マサル時ハ特ニ其地ニ住所ヲ擇ミ定ム可
ク若シ然ラザレバ諸唇委ヲ出ス可キ者之ヲ
民事原告人ニ宛テ裁判所ノ唇犯局ニ出ス可
シ

第五章 下吟味ノ事及口下吟味掛リ
裁判役ノ更京告人

第四十三条 下吟味掛リ裁判役ハ現行罪犯ノ
場合ニ於テ司法警察官吏ノ執行ヲ得可レ
自己ノ公務ヲ以テ執行ヲ得可レ

第四十四条 下吟味掛リ裁判役ハ前条ノ場合
ニ於テ其下吟味ニ取掛リ又ハ犯罪ノ地ニ至
リ時其旨ヲ檢査局ニ長ニ報告ス可ク且ツ
檢察官ノ立會アル時ハ其求人ニ應ジテ下吟
味ヲ為ス可シ

第四十五条 又下吟味掛リ裁判役ハ檢察官又
ハ司法警察官吏ノ既ニ下吟味ニ取掛リタル
時其完全ナリト思ハサル如置テ更ニ改メ為
ス下ヲ得可シ

第四十六条 現行罪犯ノ場合ノ外ニ下吟味掛

裁判役其公務ヲ以テ下吟味ニ取裁ル可カ
ラス

第四十七條 然レモ下吟味裁り裁判役法ニ適

シテ一旦下吟味ヲ為シ始メタル時ハ連續シ

テ之ヲ行フ如何ナル求メテ為ス者アリモ自

カラ適當ナリト思フ如ク之ヲ為シ終ル可シ

第四十八條 檢察官及レ裁判所ハ何時ニ限ラ

ズ下吟味ノ模様ノ報告ヲ得ニト要スルノ權

アリ

第四十九條 民事原告人及レ被告人ハ下吟味

裁り裁判役ノ既ニ下吟味ヲ為シ終リシヲ思

度スル時ニ非サレハ下吟味ノ模様ノ報告ヲ

得ニト要スルノ權ナリ唯下吟味裁り裁判役

ニ其下吟味ヲ成就ス可キヲ求ムルトテ得可

キノミトス

第五十條 被告人ハ其拘執ニ答フル前ニ下吟

味裁り裁判役ノ管轄異ナル旨ヲ述ヘ又ハ法

律上ニ其訴告セラレレ事ヲ罪犯ト為サレ

旨ヲ述ヘ其拘執ヲ受ケルヲ拒ムトテ得可シ

第五十一條 下吟味裁り裁判役ハ檢察官ノ申

立答ヲ受取り且民事原告人ヲ拘執セシ上ニ

テ二十四時内ニ前條ニ記スル附帯ノ訴ヲ裁判

ス可シ

第五十二條 原告及レ被告人ハ前條ノ言渡ニ

付テ故障ヲ申立ラレトテ得可ク且其故障ヲ

申立テ三時ハ拘執ヲ中止ス可シト虽モ之カ

为メ下吟味ヲ中止ス可カラス

第五十三条 検察官ト犯罪被告人トハ官費人
民事原告人ハ自費ニテ證テ証人問知ヲ求メ
又ハ其他下吟味ノ手續ヲ求ムルコトヲ得可シ
第五十四条 前条ニ記セシ求メハ検察官ノ申
五ヲ聴キタル上ニテ之ニ答ヘ且然ル時ハ亦
相手方ノ申立ヲモ聴ク可シ但シ其言渡シニ
眼ニサレ者ハ裁判所ニ故障ヲ申立ツレト
得可シ

第六章 証拠ノ事

第五十五条 下吟味裁リ裁判役ハ其手續ヲ為
ス間何時ニテモ登記官ノ立會ヲ得可ク登記
官ハ下吟味裁リ裁判役ト共ニ調査ニ姓名ヲ

手署シ且言渡唇及口証唇炎ヲ貯メ置ク可シ

第一款 証物ノ事

第五十六条 下吟味裁リ裁判役ハ犯罪ノ為メ
害ヲ被リシ物又ハ人ノ模様ヲ証シ且犯人ヲ
窺出シ並ニ犯罪ヲ鑑定スルニ益アル證テハ
証拠ヲ集メシ
第五十七条 若シ右ノ証ヲ得ルニ付キ医師又
ハ藝術家ノ助ケノ要スル時ハ下吟味裁リ裁
判役其為ス所ノ事ニ立會スルヲ監督ス可シ
第五十八条 差シ又預メ為ス可キ業ハ必要ナ
ルニ因リ或ハ数回試験ヲ為スノ必要ナルニ
因リ又ハ其他ノ理由ニ因リ下吟味裁リ裁判
役ノ居合ハセサレ所ニ於テ証ヲ立テシム可

キ時ハ其裁判役驗真ノ種類ト証ス可キ箇条
トヲ定ムル言渡シヲ為ス可シ但シ其言渡昏
一ハ其趣意ヲ記入ス可シ

第五十九条 医師及ヒ藝術家ハ下吟味掛リ裁
判役ニ向テ其本心ニ從ヒ詐偽ナク其説ヲ述
ス可キノ誓ヲ為シ且其姓名ヲ手署セシ申立
昏ヲ記ス可シ但シ其申立昏ハ下吟味ノ昏委
中ニ加ハ相当ノ証ト為ス可シ

第六十条 下吟味掛リ裁判役ハ犯罪ニ管シタ
ル物件及ヒ昏委ノ真物ニ相違ナキトテ証明
ス可シ
又右裁判役ハ已レノ所属裁判所ノ管轄外ト
虽モ其裁判所ハ在ノ府外ニ於テ右等ノ証ヲ

立テシム可キ時ハ司法警察官吏ニ前ニ記ス
ル自己ノ職務ヲ任スルトテ得可シ又已レノ
所属裁判所ノ管轄外ニ於テ右等ノ証ヲ立テ
シム可キ時ハ其地ノ裁判所ノ下吟味掛リ裁
判役ニ右ノ職務ヲ任スルトテ得可シ又其委
任ヲ受ケテ下吟味掛リ裁判役ハ更ニ其職務
ヲ司法警察官吏ニ任スルトテ得可シ但シ此
等ノ場合ニ於テ第七十九条ノ規則ヲ用テ
ル差支ヘナカラス可シ

第六十一条 賈造ノ事ニ於ケル照徴昏委ノ真
物ニ相違ナキ旨ヲ証シ且之ヲ認ムルニ付キ
許訟法ニ定メタル規則ハ治罪法ニモ亦之ヲ
適用ス可シ

第二款

証人ノ事

第六十二条 下吟味掛り裁判役ハ現ニ犯罪ノ在ルヲ及ヒ其模様ト被告人ノ有罪或ハ無罪トシテ証ス可キ事柄ニ付キ然テノ証人ヲ拘ルスルヲ得可シ

第六十三条 然レモ右裁判役ハ裁判所ニ於テ証ヲ申五ツルノ權ナキ者及ヒ許訟法ノ規則ニ循ヒ其証ノ申立ニ付キ故障ヲ述アルヲ得可キ血族及ヒ縁族ノ親ノ申立ヲ得ノ為メ聴取ル可シ

第六十四条 証人ハ使吏ヲシテ之ヲ呼出サシム可シ但シ此規則ト下吟味掛り裁判役自己ノ意ニ任カセ出席シタル証人ヲ拘ルス可キ

規則ト相觸ル、丁十カレ可シ

第六十五条 下吟味掛り裁判役ハ檢察官ノ求メニ應リ呼出シタル各証人ヲ拘ルス可シ

第六十六条 下吟味掛り裁判役ハ被告人ノ指示シタル各証人ヲ呼出サシメ且民事原告人ノ呼出ス可キ各証人ヲ其特定ハシ期日ニ拘ルス可シ

第六十七条 然レモ前條ノ場合ニ於テハ下吟味掛り裁判役其拘ル可キ箇条ノ大畧ヲ定メシトシテ直ニ其裁判所ニ申立ニ取掛ル可キ旨ヲ言渡スルヲ得可シ但シ此場合ニ於テハ本人其言渡各ノ送達ヲ得タルヨリ二十四時内ニ其言渡ニ付キ故障ヲ述フルヲ得可

第六十八條 呼出ヲ受ケタル証人若シ其呼出
ニ猶ハサル時ハ下吟味掛リ裁判役檢察官ノ
申立ヲ聽キタル上ニテ初犯ニ於テハ百圓ア
ストルノ罰金ヲ言渡シ且其者ノ費用ニテ更
ニ之ヲ呼出ス可シ

第六十九條 再犯ニ於テハ引出状ヲ出ス可シ
第七十條 証人ニ罰金ヲ言渡ス其言渡ニ付テ
ノ故障^申五ハ初メテ其出席スル時ニ至ル迄之
ヲ許ルニ又然ルミテラス引出状ヲ出シタル
時ノ後ト雖モ亦之ヲ許ルス可シ然レモ其者ニ
人違ニ非サルヤ否ノ問ヲ除クノ外其他ノ問
ニ答ヘタル後ハ之ヲ許ルサス○其故障申立

ハ下吟味掛リ裁判役之ヲ裁判ス可ク其裁判
役ハ証人并解ノ復由ヲ鑑定ス可シ

第七十一條 第六十八條ニ記スル言渡ニ付キ
故障申立ヲ為サレ時又ハ故障申立ヲ為ス
ト虽モ其裁判ヲ言渡シタル時ハ証人等是等
ノ言渡ニ付キ故障ヲ申立ソ可カラス

第七十二條 若シ証人病ニ罹リ又ハ差支アル
時ハ下吟味掛リ裁判役其証人ノ住所ニ至リ
其申立ヲ聽ク可シ

第七十三條 若シ証人裁判所ノ管轄地外ニ住
スル時ハ下吟味掛リ裁判役其証人住所ノ地
ニ管轄スル裁判所ノ下吟味掛リ裁判役ニ其
權ヲ委任ス可シ

第七十四条 又証人裁判所ノ管轄地内ニ住ス
ルト虽モ其住所ト裁判所々在ノ地ト遠ク隔
タリタル時ハ司法警察官吏ニ証人ノ申立聽
取ノテラ委任スルヲ得可シ但シ此事ハ臨時
特別ノ場合ノミニ限ル可シ

第七十五条 送テ下吟味掛リ裁判役下吟味ノ
午続ヲ為スタノ又ハ証人ノ申立ヲ聽取ル為
メ其權ヲ他人ニ委任スル時ハ其為ス可キ所
業ト其間ヲ可キ箇条トテ洋細ニ定ム可シ

第七十六条 若シ下吟味掛リ裁判役他人ニ其
權ヲ委任スル前ニ原告及ビ被告ニ其要ム可
シト思ヘル証人ヲ立テ可キト己レノ定メシ
問トニ付キ其意ヲ問知スルナキ時ハ右裁判

役申立昏テ差出ス前ニ証人何知レテ調昏テ右
ノ原告ニ示シ其願ニ因リ其要ムル所ノ証
人ヲ立テ且証人ヲ問知スル他他人ニ委任ス可
シ

第七十七条 如何ナル場合於テハ証人ハ被告
人ノ在ラザル所ニ於テ民事原告人ト相對セ
シム可カラズ又民事原告人ハ被告人ノ在ラ
ザル所ニ於テ証人ト相對セシム可カラズ

第七十八条 然レモ被告ノヨリ特ニ求ムル時
ハ証人ヲシテ被告ト相對セシム可シ○但
シ此度ヲ為スニ付テハ証人以前申立テタ
ル証人ノ驗真シ且証人ヲシテ其申立テシ
相違ナキヤテ更ニ擔ハシム可シ

第七十九条 検察官ハ証人ヲシテ被告人又ハ
民事原告人ト相對セシムル場合ニ非サレハ
証人ノ証ヲ申述フル席ニ立會フ可カラズ
第八十条 証人ハ互ニ之ヲ相對セシムルヲ
得可シ

第七章 犯罪被告人ニ對スル預防ノ
処置

第八十一条 若シ犯罪被告人其呼出ニ猶ヒ出
席セザル時又ハ其訴ヘラレシ犯罪ノ種彙第
十八条ニ記スル如クタル時ハ下吟味掛リ裁
判後其被告人ニ對シ引出状ヲ出ストテ得可
シ

第八十二条 前条ノ場合ニ於テ被告人ヲ何知

シタル上犯罪ヲ思料ス可キ徵憑十分ナル程
模様アル時ハ下吟味掛リ裁判後即刻又ハ其
後ニ逮捕状ヲ出シ或ハ引出状ヲ變テ逮捕状
ト為ストテ得可シ

第八十三条 引出状ニハ左件ヲ記ス可シ

第一 被告人ノ姓名職業住所

第二 罪ヲ訴ヘラレシ其事柄

第三 引出状ヲ所持スル各使吏ノ兵カ

カヲ預メタル者ニ其被告人ヲ捕ヘ之ヲ

引出下吟味掛リ裁判後ノ面前ニ引出ス

可キ命令

此引出状ハ下吟味掛リ裁判後其日附

ヲ記シ且姓名ヲ予署ス可シ

第八十四条 被告人が捕へし其地ノ逮隔ナル
= 因リ又ハ之ヲ捕へシ時判ノ遅キ= 因リ其
被告人が直キ= 下吟味掛リ裁判及ノ面前ニ
引出スリ註ハサル時ハ假リ= 拘留場中ノ一
室ニ入レ置ク可シ但シ既ニ刑ヲ言渡サレシ者
又ハ逮捕状ニ因リ捕へラレシ者ト雜居セシ
ム可カラス

第八十五条 若シ引出状ノ受ケニ被告人が下吟
味ヲ為ス裁判所ノ管轄地外ニ於テ捕へラレ
タルニ於テハ其被告人其地ヲ管轄スル裁判
所ノ下吟味掛リ裁判及ノ拘留ヲ受ケント求
ムルヲ得可シ但シ此場合ヲ於テ其被告人
ハ其裁判及ノ諸証各等及ニ心を得各等ヲ受取

ルニ至ル迄假リノ拘留ヲ受ケシ終ニテ待タ
サレヲ得ス

第八十六条 其召捕ノ地ヲ管轄スル裁判所ノ
下吟味掛リ裁判及ノ拘留ノ上引出状ヲ受シ
テ逮捕状ト為スヲ得可シ但シ当然下吟味
ヲ為ス可キ裁判及ハ証各等ヲ取調へタル上
其被告人ノ自己ノ管轄地内ノ拘留場ニ移ス
可キヲ言渡スヲ得可シ

第八十七条 逮捕状ハ檢察官ノ説ヲ聽キタル
上ニ非サレハ之ヲ出ス可カラス但シ檢察官
ハ下吟味ノ各等ヲ見タル上ニテ其説ヲ申立
ツ可シ

第八十八条 逮捕状ハ引出状ト曰シキ諸件ノ

記ス可シ又逮捕状ヲ出セシ時ハ拘留場ノ長ニ被告人ヲ受取り之ヲ拘留ス可キノ命ヲ下ス可シ

第八十九条 逮捕状ハ拘留人ノ姓名簿中ニ之ヲ記ス可シ

第九十条 逮捕状又ハ引出状ハ其正本ヲ被告ニ示シ且其寫ヲ被告ニ渡シタル上ニ非サレハ之ヲ執行ス可カラズ

其正本ニハ其寫ヲ被告ニ渡シタルト又ハ被告ノ之ヲ受取ルヲ肯セタルトテ記ス可シ

第九十一条 引出状及ニ逮捕状ハ其日附ヨリ六月ノ後ニ至テハ下吟味掛リ裁判後又ハ檢

察官長檢更ニ檢印セザルニ非テ之ヲ執行ス可カラズ但シ右等右官吏ハ其檢印ヲ檢

第九十二条 下吟味掛リ裁判後ハ唯四十八時間

間ニ於テハ被告人ヲ拘留スルヲ得可ク若シ此時

間ニ於テハ要テハ其期限ハ六日以上之ヲ延ハス

第九十三条 下吟味掛リ裁判後ハ被告ノ其弟

ニ至ル迄ハ家族ト立會人ト面前ニ於テ

應接ス可キトテ言渡スヲ得可シ但シ其立會人ハ被告人以テ之ヲ犯罪ノ事ニ付キ其

被告人他人ト辞ヲ通スルヲ制スルノ権アリ

第九十四条 被告人ノ拘留中ト虽モ五會人ナク其代言人ト應接スルコトヲ得可シ但シ之レカ为ナニハ其代言人控訴院所屬ノ代言人タルヲ必要トス

第九十五条 下吟味裁判後ハ何時ニテモ已レト出セシ逮捕状又ハ引出状ヲ免除スルコトヲ得可シ

此言渡ハ故障ヲ申立リレテ許サス
第九十六条 被告人ハ何時ニテモ假リノ釋放ヲ得ニト求ムルコトヲ得可シ但シ其求メノ裁判役其會淺室ニ之ヲ为シ其會淺室ニ於テハ檢

察官ノ申立昏テ則タル正ニテ其面前ニ於テ其求メノ旨ヲ裁定ス可シ

第九十七条 此裁判ハ控訴法ヲ以テ之ヲ取消スニト許ヲ可カラス

第九十八条 被告人假リニ釋放ヲ得ニトスル求メハ其棄却セラレシ時更ニ之ヲ为ス可カラズ但シ此規則ハ下吟味裁判役自己ハ職務ニ因リ又ハ檢察官ノ求メニ因リ被告人ヲ假リニ釋放ス可キ權ト相觸ル、コトナカル可シ

第九十九条 民莫原告人ハ被告人ヲ逮捕ヲ求ム可カラス又其被告人ヲ釋放スルニ管ニ知レ并論ヲ時其説ヲ聞クニ及ハス

第百条 控罪ノ被告人其住所アル時又ハ嘗テ
一ケ年以上禁錮ノ刑ヲ言渡サレシトナキ時
ハ其間知ラ受ケタルヨリ八日ノ後ニ至リ当
然保釈人ヲ立テス假リニ釋放ヲ受クルコトヲ
得可シ

第百一条 下吟味掛リ裁判役又ハ此裁判役ノ
言渡ヲ取消サント為ス願フ裁判スル裁判所
ハ右保証高ヲ定ム可シ但シ其保証高ハ左ノ
順序ニ於テ左件ニ拂フニ充テ用フ可シ

第一 官ノ費用

第二 民事原告人ノ差出シタル費用

第三 罰金

又又右保証高ハ前ニ記スル諸件ヲ償フ可キ高ナ

外別段ノ言渡ヲ以テ定ム可キ金高ヲ包含ス
可ク且其金高ハ左ノ順序ヲ以テ左件ニ充テ
用フ可シ

第一 罰金ト是匠出セシ費用高トハ外裁

第二 判言渡ヲ執行ノ費用

第三 被告人出席セサルニ付テ其過代

第百二条 又重罪ニ付ケル被告人当然假リノ
釋放ヲ受ケ可カラス然レモ裁判所ヨリ保証
高ノ有無ヲ伺ハス前ニ記シタル法方ヲ以テ
假リノ釋放ヲ言渡スコトヲ得可シ

第百三条 下吟味掛リ裁判役ノ職務ヲ為シ終
リタル後被告人假リノ釋放ヲ得コトヲ訴フ可
キ時ハ各其犯罪訴訟ヲ管轄ス可キ初告裁判

所又ハ控訴裁判所ニ其釋放ヲ許シ此等ノ裁判所ハ裁判役ノ會議室ニ於テ其附帶ノ訴ヲ裁判ス可シ但シ其裁判ハ更ニ之ヲ取消サント訴フ可カラス

第百四条 如何ナル場合ニ於テモ犯罪ノ模様更ニ重劇ナルヲ覺ユル時ハ掌ヲ引出状又ハ逮捕状ヲ免除シ或ハ別段ノ言渡アリテ被告人假リニ釋放ヲ受ケシニ管セズ其逮捕ヲ言渡スコトヲ得可シ然レモ下吟味掛リ裁判役其職務ヲ行ヒ終リシ後ニ於テハ其裁判役犯罪ノ訴訟ヲ裁判ス可キ裁判所ノ名前ヲ以テ其裁判所ノ長及ヒ其書記官ヲ以テ逮捕状ヲ檢印ヲ為サシムルニ上ニ非サレハ其逮捕状ヲ実

際ニ執行ス可カラス但シ其裁判所長及ヒ書記官逮捕ヲ許ス言渡テ其檢印ノ傍ニ附記ス可シ
逮捕ヲ許ルニ言渡ハ檢察官ノ申立昏ヲ見立其況ヲ聽キ知ル上ニ非サレハ之ヲ為ス可カラズ
第百五条 如何ナル場合ニ於テモ假リニ釋放ヲ得タル被告ノ裁判所ハ裁判役會議室ノ言渡ニ因リ更ニ逮捕シ且重罪ノ訴ヲ受ケシ終ニ之ヲ重罪裁判所ニ送ルコトヲ得可シ
第百六条 下吟味掛リ裁判役ノ其任セラレシ諸件ト下吟味掛リ延セシトニ原因ト同一週間ニ一度ノ裁判役ノ會議室ニ申立フ可シ

第八章

下吟味ノ終ル事及口被告人ヲ

第百七条

下吟味ノ終ル事及口被告人ヲ

相当ノ裁判所ニ移ス事
前ニ民事原告人ト被告人トニ其旨ヲ告知ス
可シ但シ民事原告人及口被告人ハ其意ヲ陳
述シテ裁判役ノ調査ニ之ヲ記入スルヲ求
メ且其中立ツル如ク証ヲ立テ並ニ証人ヲ問
ヒスヲ求ムルヲ得可シ

但シ此等ノ求メハ第五十四条ニ記スル如ク
裁判ス可シ

第百八条

下吟味ノ終リシ上ニテ諸唇萎ヲ檢

査弓ノ長ニ渡シ其長ニ十四時内ニ之ヲ取調
フ可シ

第百九条

若シ檢察官被告人ニ控罪又ハ注誤

アリト思フ時ハ被告人其管轄ノ裁判所ニ於
テ直ニニ裁判ヲ受けシト欲スルヲ否テ問ヒ
然リト答フル時ハ其裁判所ニ犯罪人移
ス可シ

第百十條

民事原告人ハ各記官ヨリノ唇状ヲ

以テ之ヲ呼出不可ク又民事原告人ハ其所
移サントスル裁判所ノ管轄異ナリシ旨ヲ述
フル時ニ非ラレハ直ニニ其所ニ右裁判所ニ
移スニ付キ故障ヲ述フ可カラズ但シ裁判所

ノ管轄異ナリシ旨ヲ述フル時ハ裁判役會
室ニ於テ其中述ル旨ヲ裁決ス可シ
第百十一條
又被告人既ニ拘留セテレタル時

ハ諸君類ヲ檢察官ニ渡セシヨリ四十八時付
ニ第百九条ニ記シタル如ク其被告人ニ問フ
可シ

第百十二条 其被告人ノ答詞ヲ調査ニ記シ之
ニ姓名ヲ予署セシメシ時ハ即チ管轄裁判所
ノ最近ノ裁判席ニ被告人ニ呼出シタルト日
一ノ知アリト為ス可シ但シ被告人三日ノ猶
豫ヲ求ムル時ハ格別ナリトス

第百十三条 民事原告人出席セサル時ハ使吏
懲治罪訴訟ニ付キ呼出ヲ為ス可キ通常ノ期
限ヲ遵守スルコトアリ唯一只ノ猶豫ヲ許レシ
之ヲ呼出スコトヲ得可シ

第百十四条 總テ其他ノ場合ニ於テハ其訴ヲ

裁判役

會淺室ニ移ス可シ

第百十五条 檢察官被告人ヲ重罪裁判所ニ移
ス可キコトヲ求メサル時ハ會淺室ニ出席スル
裁判役ノ員數下吟味裁り裁判役ニ除キ三名
タル可シ但シ下吟味裁り裁判役ハ助言ヲ為
ス投言ノ權ヲ有スルノミトス

第百十六条 又檢察被告^官人ヲ重罪裁判所ニ移
ス可キコトヲ求ムル時ハ右裁判役三名ノ補佐
トシテ別ニ四名ノ裁判役ヲ出席セシム可シ
但シ其四名ハ犯罪ヲ思料ス可キ事柄ノミニ
付キ決定ノ投言ヲ為スノ權アリ

第百十七条 下吟味ノ諸君類ハ裁判役ノ會淺
室ニ之ヲ差出ニ下吟味裁り裁判役ハ其會淺

室ニ申立ヲ為ス可シ

第百十八條 檢察官民事原告人被告人ハ右申立ノ席ニ立會ヒ且此等ノ者呼出ノ上出席スル時ハ互ヒニ相對シテ其說ヲ申述フ可シ但シ被告人ハ最終ニ言辯ヲ奏ス可シ

第百十九條 被告人ヨリ特ニ求ムル時ニ非サレハ裁判席ヲ公ケニ為ス可カラズ若シ固ノ凡儀ヲ害スルノ恐アル時ニ非サレハ被告人ノ求メテ擧届ク可シ

第百二十條 若シ裁判後會淺室ニ於テ重罪ヲモ軽罪ヲモ誣誤ヲモ思料ス可カラズト思フ時ハ犯罪ノ訴ヲ棄テ可キノ言渡ヲ為ス可シ第百二十一條 其言渡ハ之ヲ取消サント訴フ

可カラズ

第百二十二條 然レモ其被告人ニ付テ更ニ復タ犯罪訴訟ノ起ル時ハ之レカ為テ再ヒ下吟味ニ取扱レルヲ得可シ

第百二十三條 若シ裁判後會淺室ニ於テ被告人ニ誣誤アリト思フ時ハ其被告人ヲ誣誤裁判所ニ移ス可シ

第百二十四條 若シ裁判後會淺室ニ於テ被告人ニ輕罪アリト思フ時ハ其被告人ヲ懲治罪裁判所ニ移ス可シ又此場合ニ於テ特ニ求テ為ス者ヲテサレハ其公務ヲ以テ逮捕状ヲ確定ス可キヤ又ハ之レノ免除ク可キヤヲ言渡ス可シ

第百二十五条 若シ裁判役會淺ニ於テ被告人
ニ重罪アリト思フ時ハ補佐人四名ヲ加ヘテ
裁判役ノ員數ヲ全フシ被告人ヲ其重罪犯ノ訴
ヲ受ケシ終ニテ重罪裁判所ノ最近ノ裁判席
ニ移ス可シ

又右會淺室ニ於テハ被告人ヲ逮捕ス可キト
言渡シ又既ニ拘留セラレタル時ハ其係拘
留ニ置リ可キトテ言渡ス可シ

第百二十六条 被告人ヲ相当ノ裁判所ニ移ス
裁判役會淺室ノ言渡各ニハ必ス其犯罪ノ所
ヲ許ルス法律ノ箇条ヲ記入ス可シ

第百二十七条 其言渡ハ右法律ノ箇条ニ定ム
ル犯罪ノ事ニ付キ二十四時内ニ控訴裁判所ニ之ヲ控訴ス

ルヲ得可シ但シ其控訴ハ裁判所管轄ノ事ノミニ管ス可シ

第百二十八条 控訴ノ場合ニ於テハ犯罪ノ所
ニ管係アル諸各委ラ二十四時内ニ控訴裁判
所ノ検事局ニ差送ル可シ

控訴裁判所ニ於テハ檢察官ノ申立各ト各管
係人ノ差出セシ覺各トヲ見タル上各人ノ居
ラサレ所ニ於テ裁判役會淺ヲ為シ直チニ裁
判ヲ言渡ス可シ

第百二十九条 控訴裁判所ノ裁判役會淺室ニ
於テハ何時ニテモ其公務ニ用リ又ハ特別テ
求メニ因リ追加ノ下吟味ヲ為ス可キ旨ヲ
言渡ストテ得可シ

又其會淺室ニ於テハ其指定ナル証人ヲ拘知

不可キ丁ヲ言渡シ又ハ其會淺室着クハ其特
ニ任セシ裁判殿一名ノ面前ニ於テ云々ノ証
ヲ立ツ可キ丁ヲ言渡スヲ得可シ

第百三十三條 檢察官ハ會淺室ニ於テ又ハ其特
ニ任セシ裁判殿一名ノ面前ニ於テ証人ノ証
ヲ申立テ又ハ其他ノ方法ニテ証ヲ立テシム
ル時之ニ立會ノ可シ又民事原告人及ニ被告
人モ其席ヲ呼出サレ可シ

一 檢察官ハ會淺室ニ於テ又ハ其特ニ任セシ裁判殿一名ノ面前ニ於テ証人ノ証ヲ申立テ又ハ其他ノ方法ニテ証ヲ立テシムル時之ニ立會ノ可シ又民事原告人及ニ被告人モ其席ヲ呼出サレ可シ

埃及法
律書

治罪法草案

第二卷

司
法
官

法律書 治罪法草案

法律書

法律書及治罪法草案

其第二卷 裁判所

第一章 註誤裁判所

第三百一十一條 註誤裁判所 懲治罪裁判所

裁判役會議室 言渡 因 又 檢察官或

民事原告人 呼出狀 送 因 其犯罪

第三百一十二條 呼出狀 路程 准レタル猶

豫ノ外 二十四時内 出席ス可キ旨ヲ

伊記ス可シ 又其呼出狀ニハ犯罪ノ詠ト刑法ノ

箇條ト記入ス可シ

第三百十三條 裁判役 何時ニテモ原告被告

又 檢察官 未 因 裁判席ヲ関ク前ニ

司法省

罪犯ヲ証シテ立ツ可キコト又ハ其他總テ急速ナ
ルヲ要スル簡約ハ下吟味ヲ為ス可キコトヲ言
渡スヲ得可シ

第百三十四條 若シ呼出ヲ受ケタル者其定日
ニ出席セズ又ハ名代人ヲ差出サ、ル時ハ抗
傳ノ俟裁判ヲ受ク可シ

第百三十五條 右抗傳ノ俟受ケタル裁判言渡
ニ付テテノ故障申立少路程ノ猶豫ノ外右言渡
唇ヲ受取リタルヨリ三日内ニ之ヲ為ス可シ

但シ其故障申立ヲ為シタル時ハ次ノ裁判席
ニ呼出サレタルト同一ノ効アリトス
其故障申立書ハ書記局ニ差出シ裁判席ヲ関
連シテ送ル

可シ
民事原告人ノ抗傳ノ俟受ケタル裁判言渡ニ
付テテノ故障申立ハ之ヲ取上ク可カラズ

第百三十六條 裁判席ハ必ス公ケタル可ク又
其裁判席ニ於テハ調唇ヲ讀上ケ且出席シタ
ル証人ヲ申立ヲ聽ク可シ

証人ハ之ヲ出シタル者最初ニ其同証人ヲ為シ
其他ノ者次第ニ同証人ヲ為ス可シ

被告人ハ何時ニテモ自カラ其出シタル者ニ
非サル証人ヲ最終ニ問訊スコトヲ得可シ

裁判所長少何時ニテモ其相當ト思フ諸件ヲ
其公務ヲ以テ証人ニ問訊スコトヲ得可シ
又裁判所長ハ不適當ナリト為シ棄却シタル

問ニ付キ獨斷ヲ為スノ權アリ
又裁判所長ハ其後檢察官民事原告人被告人
ノ申立及ビ弁解ヲ聽ク可シ但シ被告人ハ必
ズ最終ニ詞ヲ發ス可シ
裁判席ノ書留ニハ前ニ記シタル法式ヲ行フ
タル旨ヲ証ス可シ
第百三十七條 証人ハ本人之ヲ呼出シ又ハ本
人之ヲ連レ來ル可シ
第百三十八條 裁判ハ裁判席ニ於テ直ニ之
ヲ言渡シ又ハ遅ク氏次ノ裁判席ニ於テ之ヲ
言渡ス可シ
第百三十九條 警察規則ニ背キタル罪ニ付テ
ハ相当ナル官吏ノ記シタル調書ヲ以テ其証

拠ト為ス可シ但シ之ニ反シタル証ヲ出テ來
ル時ハ格別ナリトス
第百四十條 十六歳以上ノ証人ハ眞實ヲ述ヘ
眞實ヲ外述ヘサルヲ誓テ為ス可シ○右証人
ニハ其証人故障ノ申述ヲ受ク可キ景状ノ中
ニ在リヤ又ハ一方ノ者ノ使用ヲ受クル者タ
ルヤヲ問フ可シ
第百四十一條 宗系ノ血屬及ビ姻屬ノ親又ハ
兄弟姉妹及ビ之レト同級ノ姻屬ノ親ハ故障
ノ申述ヲ受クルコトアル可ク且ツ嘗テ故障ノ
申述ヲ受ケタル時ハ其申立ヲ聽ク可カラズ
但シ故障ノ申述ヲ受ケサル時ハ其申立ヲ聽
クト申出シ之カ為メ裁判手續ノ効ヲ失フコトナ

カル可シ

第百四十二條 書記官ハ証人ノ姓名、職業、住所

ヲ書留メ且ツ其証人ノ本人ノ血屬又ハ姻屬

ノ親或ハ其僕婢タルノ申立ヲ書留ム可シ

第百四十三條 若シ被告人ヲ禁錮ス可キ事情

アリテ現ニ其禁錮ヲ言渡ス時ハ裁判役前條

ニ記シタル証人ノ申立書ヲ視テ之ヲ允諾ス

可シ

第百四十四條 若シ被告人ノ訴ヘラレタル事

柄註誤ニアラス又輕罪及ヒ重罪タリト思料

使ス可カラサレ時ハ裁判役無罪ナキト言渡ス

可シ

然レ氏其裁判役ハ簡約吟味裁判所ノ権限内

ニ於テ双方互ニ討索スル償ヲ裁判スルコトヲ

得可シ

第百四十五條 若シ被告人ニ輕罪或ハ重罪ア

リト思料ス可キ時ハ右裁判役已レノ其犯罪

吟味ヲ為ス可キ權ナキ旨ヲ言渡シ諸証書類

ト共ニ双方本人等ヲ檢察官ヲ面前ニ出テシ

メ檢察官ヨリ其管轄ノ裁判所又ハ下吟味掛

第百四十六條 刑罰ノ言渡書ニハ其言渡ヲ為

スル原由タル犯罪ノ事柄ト適用シタル法律

ノ箇條トヲ記ス可ク若シ之ヲ記セサル時ハ

其言渡ノ効ナカル可シ

第百四十七條 裁判席ニ立會ヒ書記官ハ裁判

言渡ノ本日内ニ其言渡唇ノ正本ニ姓名ヲ手
署ス可ク若シ此規則ニ背ク時ハ百「フラン」
ノ罰金ヲ言渡サレ可シ

第百四十八條 註誤裁判役ハ檢察官ノ説ヲ聽
キタル上ニテ刑ヲ言渡ス可シ

第百四十九條 裁判言渡ノ執行ハ檢察官ト民
事原告人ト各々其已レニ管スル事ニ付キ其
手續ヲ求ム可シ

第百五十條 禁錮ノ刑ヲ言渡ス裁判言渡ハ控
訴ヲ為スコトヲ得可シ

第百五十一條 控訴ハ双方出席ノ上受ケタル
裁判言渡又ハ一方抗傳レテ受ケタル言渡ニ
付キ申立テタル故障ニ付テノ裁判言渡ヨリ

三日内又ハ一方抗傳レテ受ケタル裁判言渡
ニ付キ故障ヲ申立ツ可キ期限ノ終リニヨリ
三日内ニ之ヲ書記局ニ申立ツ可シ

第百五十二條 控訴ハ懲治罪裁判所ニ之ヲ為
シ檢察官ハ其裁判所ニ知刑ヲ求メテ被告人
及ビ民事原告人ヲ三日内ニ呼出ス可シ

第百五十三條 檢察官及ビ刑ヲ言渡サレレ被
告又ハ前條ニ記スル期限内ニ左ノ場合ニ於
テハ控訴裁判所ニ訴フルコトヲ得可シ但シ控
訴ヲ為シ得可キ裁判言渡ニ付テハ其期限ヲ
倍シ且ツ控訴ノ上受ケタル裁判言渡ノ日ヨ
リ其期限ヲ算ス可シ

第一 裁判言渡書ヲ記スル事柄ノ註誤ニ

非ラス又総テ罰ス可キ事ニ非サレ時
第二 裁判言渡書ニ記スル事柄ハ之ヲ罰
ス可シトモ適用シタル法律ニ誤アレ
時

第三 訴訟手續又ハ裁判言渡ノ本質ニ其
効ナキ事アル時

第百五十四條 控訴裁判所ニ於テハ檢察官ト
原被告人又ハ其名代人ノ申立ヲ聽キタル上

ニテ控訴ヲ裁判ス可シ
前条ニ記スル第一ノ場合ニ於テハ被告人ノ
無罪タル旨ヲ言渡ス可シ

第二ノ場合ニ於テ誣誤ノ罪アル時ハ刑法ヲ
適用シテ裁判ヲ言渡シ又更ニ重キ罪アル時

ハ管轄ノ裁判所又ハ下吟味掛リ裁判役ニ其
犯罪ノ吟味ヲ移ス可シ

第三ノ場合ニ於テハ是レ迄ト異ナリタル誣
誤裁判所ニ其罪ノ吟味ヲ移シ更ニ其裁判ヲ
為サシム可シ

右控訴ヲ為スニハ書記局ニ届ヲ為シ裁判席
ヲ閑クヨリ三日前ニ被告人ヲ呼出ス可シ

一方ヨリ其相手方ニ損失ヲ償フ可キ言渡ハ
控訴ニ管ヤス其効アリトス但シ此卷ノ第四

章ニ記スル方法ヲ以テ其言渡ノ取消ヲ訴出
シタル時ハ格別ナリトス

第百五十五條 誣誤裁判後ハ三ヶ月ノ間ニ為
シタル裁判言渡唇ノ表ヲ三ヶ月毎ニ檢察官

ニ送ル可シ

第二章

懲治罪裁判所

即テ輕罪裁判所

第百五十六條

懲治罪裁判所ハ法律上ニ輕罪

治罪

ナリト定メタル犯罪ヲ裁判ス可シ

第百五十七條

懲治罪裁判所ハ檢察官又ハ民

事原告人ノ訴ニ因リ又ハ裁判役會議室ヨリ

訴ノ吟味ノ抄ヤシニ因リ其犯罪ノ訴訟ヲ管

轄ス可シ

第百五十八條

其裁判所ノ官員ハ會議室ニ於

テ言渡ヲ為ス者ノ外裁判役三名及ヒ決議ノ

投言ヲ為シ得可キ輔佐四名タル可シ○此等

ノ裁判役ハ可否ヲ述フル者ノ數ニ從ヒ裁判

ヲ言渡ス可シ

下吟味掛リ裁判役ハ右裁判役中ニ加ハ

ルコトヲ得ス

第百五十九條

法律トニ於テ禁錮ノ刑ニ處ス

可キ罪ヲ訴ヘラレシ被告人ハ自カラ裁判所

ニ出席ス可シ

其他ノ場合ニ於テハ名代人ヲ出スコトヲ得可

シ

但シ裁判所ニ於テハ本人自カラ出席ス可キ

コトヲ言渡スヲ得可ク若シ其言渡ニ循ハサレ

ハ抗傳ノ俟其刑ヲ言渡ス可シ

第百六十條

若シ被告人出席セサル時ハ証人

類ヲ檢視セシ上ニテ抗傳ノ俟其裁判ヲ言渡

ス可シ

第百六十一条 執傳セシ被告人ハ第百三十五
條ニ記シタル期限内ニ其裁判言渡ニ付キ故
障ヲ述フルコトヲ得可ク且ツ其故障ヲ述ヘタ
ル時ハ次キテ裁判席ニ呼出ラ受ケタルト同
視ス可シ
其故障ノ申述屆ハ書記局ニ差出ス可シ
民事原告人タル時ハ其故障申述屆ト次ノ裁
判席ヘノ呼出狀トヲ其原告人ニ送ル可シ
第百六十二条 公ケノ裁判席ニ於ケル吟味ノ
手續ハ第百三十六條ニ記シタル方法ヲ以テ
之ヲ為ス可シ
第百六十三条 其裁判席ニ於テハ犯罪証書類
ノ相違ヲキ音ヲ証スル吟味手續ノ書類ノ外

其他ノ吟味手續ノ書類ヲ讀上ク可カラス
第百六十四条 然レハ裁判所長、檢察官及ヒ原
被告人ハ差支アリテ出席セサル証人又ハ鑿
定人ノ申立書或ハ呼出ノ上出席セサル証人
又ハ鑿定人ノ申立書ヲ心得ノ為メ讀上ク
コトヲ得可シ
第百六十五条 被告人問訊ノ旨又ハ吟味手續
ヲ為スニ方リ被告人ノ申述ヘレ旨ハ之ヲ公
ケニ為ス可カラス
第百六十六条 若シ裁判所長又ハ裁判役又ハ
檢察官前二條ニ記スル規則ニ背ク時ハ裁判
言渡ノ効ナカレ可シ
第百六十七条 証人吟味ノ前ニ檢察官及ヒ民

事原告人ハ其証セシト欲スル事柄ノ要畧書ヲ出
ラ出スコトヲ得可シ

又被告人ハ之ニ反シタル事柄ノ要畧書ヲ出
スコトヲ得可シ

第百六十八條 裁判所ニテ吟味手續ヲ為スニ
方リテハ証人又ハ鑑定人ノ申立ヲ為シ終リ

後タル後被告人ニ其申立ノ各條ニ付キ已レノ
意ヲ申述ヘントスルコトアリヤ否之ヲ問フ可

シ

第百六十九條 下吟味ノ終リタル後裁判所ニ
於テハ檢察官民事原告人被告人ノ弁解ヲ聽

テ可シ
被告人ハ必ス最終言詞ヲ發ス可シ

第百七十條 被告人拘留セラレタル時ハ最初

ノ裁判席ニ於テ裁判ヲ言渡ス可シ
被告人拘留セラレタル時ハ次ノ裁判席ニ於

テ裁判ヲ言渡スハ妨ナレトス

第百七十一條 若シ裁判所ニ於テ被告人ノ訴
ヘラレシ事柄ヲ法律上ニ於テ有罪ト為サス

又ハ其訴ヘラレシ事柄本人ノ所為ニ非ス或
ハ被告人ニ罪アリト雖モ既ニ期滿免除ノ期

ニ至リシコトヲ知ル時ハ被告人ヲ無罪ナリト
言渡シ双方ノ互ニ要需シ得可キ損失ノ償ヲ

裁判ス可シ
第百七十二條 被告人ノ訴ヘラレシ事柄ノ輕
罪又ハ註誤タル時ハ裁判所ニ於テ其刑ヲ言

渡レ且ツ民事原告人ノ要ムル損失ノ償ヲ裁
判ス可シ

第百七十三條 其裁判言渡各ニハ第百四十六
條ニ記レタル諸件ヲ記ス可シ

第百七十四條 若シ被告人ニ重罪アリト思料
スル時ハ裁判所ヨリ原被告人ヲ檢察官ノ面
前ニ出テシメ檢察官ヨリ下吟味掛リ裁判役
ニ之ヲ訴フ可シ

第百七十五條 被告人ヲ刑ニ処スル裁判言渡
ハ第百五十三條及々第百五十四條ニ記レタル
場合ト法式トニ非サレハ之ヲ取消サント
訴フ可カラズ但シ第百五十三條ニ記スル第
二ノ場合ニ於テ輕罪又ハ註誤ニ付キ控訴裁

判所ヨリ刑ヲ言渡シ又同條第三ノ場合ニ於
テ控訴裁判所ヨリ犯罪ノ裁判ヲ是追ト異ナ
レル裁判役ノ出席ヲ為ス懲治罪裁判所ニ移
シ又ハ是追ト全ク異ナレル懲治罪裁判所ニ移
ス時ハ格別ナリトス

第百七十六條 第百四十條、第百四十一條、第百
四十二條ニ記スル法式ハ懲治罪裁判所ニ於
テモ亦之ニ循フ可シ

第百七十七條 第百四十七條及々第百四十九
條ニ記スル所モ亦之ヲ適用ス可シ

第三章 重罪裁判所

第百七十八條 重罪裁判所ハ控訴裁判所ノ裁
判復會談室ヨリ犯罪ノ訴ヲ移ス言渡アルニ

非キレハ重罪ノ訴訟ヲ管轄ス可カラズ
第百七十九條 重罪裁判所ハ控訴裁判所ノ裁
判役三名ヨリ成リ陪審ノ決定ニ從ヒ法律ヲ
適用ス可シ

第百八十條 重罪裁判所ハ三ヶ月毎ニ少クモ
一度裁判席ヲ開ク可ク且ツ其席ヲ開クニ方
キテハ既ニ裁判シ得キ模様ニ至リ總テノ
重罪犯ノ訴訟ヲ其裁判所ニ申告ス可シ

第百八十一條 重罪裁判所ノ通常裁判席ヲ開
キタルヨリ更ニ其後ノ通常裁判席ヲ開クニ
至ル可キ時間ニ生レタル重罪訴訟ヲ裁判ス
ル為メ又ハ公ケノ資益ニ當レ或ハ當然ノ疑
ヲ可キコアルニ因リ「アレキサン」トシテ裁

判所管轄地外ニ於テ裁判スルノ必要ナル重
罪ヲ右裁判所管轄地外ニ於テ裁判ス可キ席
ヲ開クカ為メ控訴裁判所ニ於テハ臨時裁判
席ヲ開ク可キコトヲ決定スルヲ得可シ

第百八十二條 控訴裁判所ノ裁判役ハ其任職
ノ順序ヲ以テ更ニ重罪裁判所ニ出席シ控訴
裁判所ノ副長在ラサル時ハ最モ先キニ任職
セシ者ヲ重罪裁判所ノ長ト為ス可シ
名義ノ如何ヲ問ハズ總テ是迄重罪訴訟ノ吟
味ニ管係セシ裁判役ハ重罪裁判所ハ出席ス
ルコトヲ得ヌ

第一款 陪審

第百八十三條 三年以上埃及ニ住シ其齡三十

歳以上ノ者ハ何人ニ限ラス陪審姓名目録中ニ之ヲ加フ可シ

裁判役ハ其目録中ニ記ス可カラス又行政官局ノ長ハ其目録中ヨリ已レノ姓名ヲ除去セシムルコトヲ得可シ

第百八十四条 輕重罪ノ為メ禁錮ノ刑ヲ言渡サレシ者及ビ未夕復権ヲ得サレ家資ヲ散人ハ陪審姓名目録中ニ加フ可カラス

第百八十五条 然レモ政府ハ別段ノ規則ヲ設ケ國人ヲ陪審姓名目録中ニ加フルニ付キ特別ナル箇條ヲ定ムルコトヲ得可シ

第百八十六条 陪審ノ姓名目録ハ毎年之ヲ公ケニ為ス可シ○其目録中ニ加ハラレサレ者

夫百之レニ加ハラント為ス訴及ビ其目録中ニ加ハラレシ者ノ其中ヨリ除去セラレント為ス訴ハ値ニ之ヲ裁判所ニ為ス可シ

第百八十七条 此等ノ訴ヲ為ス者ハ二十四時間ニ換事長ヲ裁判所ニ呼出シ之ヲ相手取リ至急ノ裁判ヲ得ント求ム可シ但シ其訴人モ亦裁判席ニ出ツ可シ

第百八十八条 人ノ姓名ヲ陪審姓名目録中ヨリ塗抹スル裁判言渡ハ確定ノ者トス但シ家資ヲ散人其言渡ノ後ニ復権ヲ得タル時ハ格別ナリトス

第百八十九条 裁判席ニ立會セシ陪審後ニ其姓名ヲ陪審姓名目録中ヨリ塗抹セラレト

其裁判言渡石効ヲ失フコトナカレ可レ
 第百九十条 重罪裁判所ノ裁判席ヲ開クヨリ
 十五日前ニ控訴裁判所ハ公ケルノ裁判席ニ於
 テ本國人ノ陪審三十六名及ヒ其補員四名ト
 外國人ノ陪審及ヒ其補員ノ相当ノ数トヲ圍
 引キニ為ス可レ
 陪審ノ補員ハ重罪裁判所ノ裁判席ヲ開ク可
 キ地ニ居住ス可レ
 若シ陪審ノ姓名目錄ヲ記シタル後ニ死去
 或ハ陪審タルノ權ヲ失ヒシ者アル時ハ控訴
 裁判所ノ裁判席ニテ検察官ノ申立ヲ聽キタ
 ル上其姓名ノ塗抹ヲ言渡ス可レ
 第百九十一条 然レモ重罪裁判所ノ裁判席ヲ

開クヨリ八日前ニ被告人後ノ数条ニ記スレ
 景狀ニ於テハ特別ナル陪審ノ裁決ヲ得ント
 欲スル者ヲ拘留場ノ書記局ニ申立ツルコトヲ
 得可レ

第百九十二条 前条ニ記スレ日附ノ前ニ民事
 原告人ノ犯罪訴訟ニ管スル者アラサレ時ハ
 被告人自國人ノ過半タル陪審ノ裁定ヲ得ン
 ト欲スル者ヲ述フルコトヲ得可レ但シ此場合
 ニ於テハ被告人ト圍ヲ同ウスル陪審数名ヲ
 圍引ニ為シ以前ヨリ陪審ノ列ニ加ハリシ者
 ヲ合算シテ其数二十一名ニ至ルニ及ビ其圍
 引ヲ止ム可シ
 第百九十三条 若シ被告人ト圍ヲ同ウスル陪

審ノ数其定員タル四十二名ニ足ラサル時ハ
被告人更ニ他ノ国民ヲ指示シ其國ニ属スル
陪審ノ数ヲ被告人ト國ヲ同ウスル陪審ノ数
ニ合シケク氏四十二名ニ至ラシム可レ但シ
此場合ニ於テハ右ニ國ノ陪審ノ数ヲ合シ罪
犯ノ訴ヲ裁定ス可キ陪審ヲ闖引ニ為ス可シ
第百九十四条 第百九十一條ニ記セシ期限ノ
前ニ民事原告犯罪犯ノ訴ニ管シタル時ハ原告
及ビ被告ヨリ互ニ其相手方ノ同國人ヲ陪
審中ニ加ハサル可キ旨ヲ求ムルノ權アリ但
シ此場合ニ於テハ其故障アル國ノ人民ヲ除
キ陪審三十六名ト補員四名トノ目録ヲ完全
スル為メ追捕ノ闖引ヲ為ス可シ

此條ト前三條トニ記スル權利ヲ行ハント欲
スル者ハ重罪裁判所ノ裁判席ヲ闖クヨリハ
日前ニ書記局ニ其旨ヲ申述フ可シ但シ其本
日若シ祭礼ノ日ニ當ル時ハ二十四時ノ猶豫
ヲ許ルスコヲ得可シ
第百九十五条 若シ民事原告人前ニ記スル期
限ノ後ニ犯罪訴訟ニ管セシ時ハ被告人ノ共
民事原告人ト國ヲ同ウスル陪審ニ付キ故障
ヲ述フ可キ權ヲ更ニ大ナラシメ民事原告人
ト國ヲ同ウスル陪審全員ノ半ハニ至ル迄ノ
數ニ付キ故障ヲ述フルコヲ得セシム可シ
第百九十六条 何人ニ限ラヌ一ケ年ニ二度以
上重罪裁判所ノ陪審タルニ及ハス

然レハ重罪裁判所ノ裁判席ヲ閑ク間故障ヲ述ヘテ出席セザリシ陪審ハ前項ノ旨ヲ申立テ更ニ出席スレラ免カレ可カラス

第二款 裁判席ヲ閑ク前ノ手續

第百九十七條 換事長ハ被告人ニ左ノ書類ヲ送達ス可シ

第一 裁判席ヲ閑クヨリ五日前ニ裁判席立會ヲ陪審ノ簿目録

第二 右ト同一ノ期限内ニ諸種ノ調書、鑑定人及ビ証人ノ申立書但シ寫屑ニ誤アリ又ハ遺脱アリト或モ之カ為ノ其効ヲ失フナカレ可シ

第三 裁判席ヲ閑クヨリ三日前ニ出席ス

出願可キ呼出状但シ其呼出状ニハ重罪裁判所ニ犯罪ノ吟味ヲ務ス裁判役會議室ノ言渡ヲ記入ス可シ

第四 裁判席ヲ閑クヨリ二十四時前ニ換事長ノ呼出サントスレ証人ノ姓名目録

第百九十八條 被告人及ビ民事原告人ハ裁判席ヲ閑クヨリ二十四時前ニ其呼出サントスル証人ノ姓名目録ヲ五ニ送達シ且ツ重罪裁判所ノ書記局ニ其姓名目録ヲ出シテ換事長又ハ其代役ニ之ヲ送達スレム可シ

第百九十九條 前以テ其姓名目録ヲ送達セザル証人ハ重罪裁判所ニ九許ヲ得サレハ之ヲ

呼出シ其申立ヲ聽ク可カラズ但シ重罪裁判
所ニ於テハ其申立ヲ聽クトモ益タルヲ
思フ証人又ハ遠隔ノ地ニ在ル証人ハ之ヲ呼
出スコトヲ允許セサル可シ

第二百條 重罪裁判所ノ長ハ裁判席ヲ開ク可
キ日ヲ定メ且ツ換事長ノ申立ヲ聽キタル上
ニテ各犯罪ノ訴ヲ吟味ス可キ順序ヲ定ム可
シ

第二百一條 若シ一箇ノ犯罪ノ訴ヲ吟味スル
ニ付キ意外ニ手間取ルコトアル時ハ最初ノ呼
出状ニ拠リ原告被告双方共ニ次キノ裁判席
ニ出席シ又然ラズナラズ其後ノ裁判席ニモ
出席ス可シ

然レモ如何ナル場合ニ於テモ原告被告双方
ノ願アルニ非サレハ預定セシ期日ノ前ニ犯
罪ノ訴ヲ吟味ス可カラズ

第二百二條 重罪裁判所ノ長ヨリ委任ヲ受ケ
シ一官吏ハ最初裁判席ヲ開クヨリ少クモ五
日前ニ陪審ヲ招集ス可シ但シ其住所ノ路程
ニ准シ相当ノ猶豫ヲ許ス可シ

各陪審ニ親シク其招集辱ヲ渡シタルヤ又ハ
其住所ニ差置キタルヤ之ヲ調書ニ記ス可シ
第二百三條 証人ハ裁判席ヲ開クヨリ二十四
時前ニ之ヲ呼出ス可シ但シ其住所ノ路程ニ
准シ相当ノ猶豫ヲ許ス可シ

第二百四條 犯罪訴訟ノ吟味手續ニ管スル諸

書類ハ書記局ニ於テ双方代言人ノ求メニ應
シ之ヲ示ス可ク其層类ハ他所ニ携ヘ行ク可
カラズ但シ換事局ノ要用タル時ハ格別ナリ
トス

第三款 重罪裁判所ノ裁判席、双方

論弁、裁判言渡ノ事

第二百五五条 最初裁判席ヲ関キタル日ニ姓名
目録ニ記シタル各陪審ノ姓名ヲ呼上ク可シ
出席ヲ免レントスル各陪審ハ其事由ヲ申立
ツ可シ

重罪裁判所ハ檢察官ノ申立ヲ聽キタル上ニ
テ其事由ノ正当ナルヤ否ヲ裁判ス可シ

第二百六条 重罪裁判所ハ呼出ニ應シテ出席

シヤサル陪審ニ二百ヲラシクノ罰金ヲ言渡ス
可シ但シ其出席セサル事由ノ正当ナルヲ明
白ナル時ハ格別ナリトス○右罰金ヲ一旦言
渡サレシ陪審重罪裁判所ノ會議ヲ閉ル前ニ
出席シ其當テ出席セザリシ正当ノ事由ヲ辨
解スル時ハ其罰金ヲ免ル、コヲ得可シ
又右裁判席ヲ閉ナレ後トモ其陪審罰金言
渡唇ノ送達ヲ得タルヨリ三日内ニ其言渡ニ
付キ故障ヲ述フレ時ハ前項ニ記シタル權利
ヲ失フコナレ
右ノ場合ニ於テハ控訴裁判所ニ其故障ヲ申
立ツ可シ

第二百七条 又裁判席ヲ関ク時ニ方リ陪審ノ

不在ナル時ハ前条ニ記セシ所ニ同シキ罰金
ヲ言渡ス可シ但シ其陪審其不在ナル事由ヲ
述フル時ハ之ヲ裁判ス可シ

第二百八條 如何ナル場合ニ於テモ本國人又
ハ外國人ノ陪審ノ數補眞ニ合シテ二十四名
以下ナル時ニ非サレハ陪審ノ數ノ不足ナル
ニ因リ其裁決ヲ取消ス可カラス

第二百九條 各犯罪訴訟ノ裁判席ヲ開ク前ニ
裁判役ノ會議室ニ於テ被告人及ビ其代
言人ト檢官ノ面前ニテ出席ノ義務ヲ免レサレ各
陪審ノ姓名ヲ呼上ケ其姓名票ヲ順序ヲ逐テ
壺中ヨリ取り出ス可シ

第二百十條 被告人ハ陪審ノ姓名目錄中ニテ

其十五名ニ付キ故障ヲ述フルコトヲ得可ク又
檢察官モ之ト同一ノ眞數ニ付キ故障ヲ述フ
ルコトヲ得可シト雖モ必ス故障ノ申立ヲ受ケ
サレ陪審十二名ヲ残ス可シ但シ陪審中ニ不
在ノ者アリスハ正當ノ事由アリテ出席セザ
ル者アル時ハ其數ニ准レ檢察官ノ故障ヲ申
立ツ可キ陪審ノ數ヲ減ス可シ

第二百十一條 陪審ニ付キ故障ヲ申立ツル為
メニハ其旨趣ヲ指示スニ及ハス

第二百十二條 故障ノ申立ヲ受ケサレ陪審十
二名ノ姓名票壺中ヨリ出テタル時其十二名
ヲ以テ裁判席ノ陪審ト定ム可シ

第二百十三條 第百九十二條ニ記シタル場合

二於テハ先ツ被告人ト因テ同カスル陪審二
 十一名ノ中ニテ闖引ニ為ス可シ
 被告人ト檢察官トハ各々陪審七名ニ付キ故
 障ヲ申立ツレドヲ得可シ
 陪審二十一名中ノ一名又ハ数名ノ不在ナル
 時又ハ正当ノ事由アリテ出席セサル時ハ其
 数ニ准シ^察檢官ノ故障ヲ申立ツ可キ陪審ノ数
 ヲ減ス可シ
 故障ノ申立ヲ受ケサル陪審七名ノ姓名票壺
 中ヨリ出テタル後ハ煎茶ニ記シタル如ク重
 罪裁判所ノ諸犯罪訴訟ニ定メタル陪審總目
 録中ヨリ闖引ニ為ス可シ
 此第二次ノ闖引ニ付キ被告人及ビ檢察官ノ

陪審ニ付キ故障ヲ申立ツ可キ權ハ互ニ同等
 ナリトス但シ如何ナル場合ニ於テモ被告人
 ハ少クモ陪審五名ヲ付キ故障ヲ申立ツルノ
 權アリ

第二百十四條 若シ被告人數名アリテ共議ノ
 上陪審ニ付キ故障ヲ申立テサル時ハ其各名
 互ニ同一ノ員數ニ付キ故障ヲ申立ツレドヲ
 得可シ但シ其數名ニ其故障ヲ申立ツ可キ陪
 審ノ全員ヲ平當ニ分ツ能ハサル時ハ陪審ノ
 姓名ヲ呼上ル前ニ闖引ニ為シテ陪審ノ最モ
 數ニ付キ故障ヲ申立テ得可キ被告人ヲ定ム
 可シ
 又被告人數名ハ故障申立ノ或員數ニ付キ互

ニ共淺スルコトヲ得可シ但シ其餘ノ手續ハ前
ニ記セシ所ト同一タル可シ

第二百十五條 陪審ヲ屬引ニ為シタル後重罪
裁判所ニ於テ公ケノ裁判席ヲ閑ク可シ

第二百十六條 被告人ハ縛縛ヲ免シテ裁判席
ニ出ツ可シ但シ被告人ニ對シ取締ノ知置ヲ
行フ可キハ此例ニ非ス

被告人ノ人連ヒニ非サルコトハ其姓名年齢職
業住所出生ノ地其所屬ノ國ヲ申述ヘシメテ
之ヲ証ス可シ

第二百十七條 被告人ハ必ス其代言人ノ助ヲ
受ク可ク若シ然ラサレバ裁判言渡ノ効ナカ
ル可シ

其代言人ハ控訴裁判所ニ於テ其職ヲ行ヒ得
可キ推アル代官人タル可シ但シ裁判所長ヨ
リノ特許アル時ハ格別ナリトス

第二百十八條 陪審ハ次序ヲ逐テ誓ヲ為ス可
シ但シ其誓詞ハ左ノ如シ

予ハ我本心ニ循テ被告人ノ告訴セラレタ
ル罪条ト其答弁ノ旨趣トニ基キ裁定ヲ為
ス可シ

第二百十九條 然レ後ニ其犯罪告訴ノ吟味ヲ
重罪裁判所ニ移シタル言渡書ヲ讀聞カス可
シ

第二百二十條 証人ハ之ヲ呼出シテ特ニ之カ
為メ設ケタル室内ニ控ヘシメ次第ニ一人ツ

之ヲ呼出シテ其証ヲ申述ヘシム可シ
第二百一十一條 既ニ証ヲ申述ヘ了リシ証人
ハ双方論弁ノ終ルニ至ル迄裁判席ニ止マリ
居ル可シ但シ裁判所ノ特許アル時ハ格別ナ
リトス

第二百一十二條 甲ノ証人ニ乙ノ証人ノ其証
ヲ申述フル時間他席ニ退ク可キノ言渡ヲ為
シ又ハ甲ノ証人ヲシテ乙ノ証人ト互ニ相對
シテ論弁セシムルコトヲ得可シ

第二百一十三條 論弁ノ終ラサル間ハ如何ナ
ル原由アリトモ被告人ヲ他席ニ退カシム
可カラス但シ被告人甚シキ騷擾ヲ起ス時ハ
格別ナリトス

第二百二十四條 吟味ノ手續ニ付テハ第六
十二條第六百七十六條第六百七十七條ノ規則ヲ
適用ス可シ

第二百二十五條 裁判所ニ於テハ証人及ヒ鑿
定人ニ付テノ故障申立ヲ裁判ス可シ

第二百二十六條 論弁ノ終リタル後裁判所長
ヨリ其鮮明不可キ問ノ箇條ヲ定ム可シ但シ
其問ノ箇條ハ犯罪訴訟ヲ重罪裁判所ニ移ス
言渡又ハ論弁ノ事情ニ因テ之ヲ定ム可シ
右問ノ箇條ハ之ヲ讀上ク可シ
各箇ノ重要ナル事ニ付キ其問ノ詞ハ左ノ如
シ

被告人ハ云々ノ謀殺云々ノ盜奪ヲ行ヒタル

又犯罪ヲ重劇ナラシム可キ各箇ノ模様ニ付
 テハ特別ナル問ヲ設ク可シ
 又罪ヲ宥恕セシム可キ模様期滿免除、被告人
 ノ幼年ナル事又ハ幼年ト雖モ故意ヲ以テ罪
 ラ犯シタル事ニ付テモ亦前項ニ記スル如ク
 為ス可シ
 若シ又被告人ノ罪ヲ輕減セシム可キ模様ア
 ル時ハ特ニ其問ヲ設ク可シ
 第二百二十七條 檢察官又ハ代言人ハ問ノ設
 ケ方ヲ論スルコトヲ得可シ
 第二百二十八條 裁判所ハ前條ニ記スル附帶
 訴訟ヲ裁判ス可シ○右ノ問ヲ定メタル上

ハ陪審評議ヲ為スタメ別席ニ退ク可シ
 官用ス文詞ヲ以テ記シタル右問ノ目錄ト次
 キノ六條ノ拔書トハ之ヲ陪審ニ渡ス可シ
 第二百二十九條 陪審ハ其決定ヲ為シタル後
 ニ非サレハ評議ノ室ヲ出ツ可カラズ
 陪審ハ其決定ヲ為スニ至ル迄ハ他人ト詢ヲ
 参ユ可カラズ若シ此規則ニ背ク時ハ四十圓
 アストルノ罰金ヲ言渡サル可シ但シ其罰金
 ハ檢察官ノ求メニ因リ裁判所ヨリ速カニ之
 ヲ言渡ス可シ
 第二百三十條 陪審ハ最初犯罪告訴ノ主タル
 事柄ヲ決定シ次キニ其事柄ニ附加シタル模
 樣ヲ決定シ終ニ犯罪ヲ輕減ス可キ模様ヲ決

定ス可シ

第二百三十一條 圍引ノ時最初圍ニ当リタル陪審又ハ其者ノ在ラサル時ハ陪審互ニ恠議シテ其長ト定メタル者各問題ヲ高聲ニ誦シケ然ル後陪審其各問題ニ付キ密カニ可否ノ投言ヲ為ス可シ

第二百三十二條 陪審ハ各種ノ証ヲ得ント要ムルコトナク且ツ其決定ノ為メ被告人如何ナル刑ニ処セラレヤヲ考慮スルコトナク獨リ其本心ノ信スル所ノニニ循ヒ決定ヲ為ス可シ

若シ其本心ニ於テ被告人ニ罪アリト思ヒ又ハ否テ模様ニ確証アリト思ヒ、然レト答

ヘ之ニ反シタル場合ニ於テハ否ト答フ可シ

第二百三十三條 陪審一箇ノ問題ニ付キ投言ヲ為シタル後其投言ノ数ヲ筭シ然ル後次キノ問題ノ投言ニ取掛ル可シ
主タル問題ニ付キ否トノ答アル時ハ之ニ附帯セル問題ニ付キ投言ヲ為スニ及ハス

第二百三十四條 可トスル投言ト否トスル投言トノ数ヲ筭シ其多キ方ニ決定ス可シ若シ又可トスル数ト否トスル数ト相同シキ時ハ其決定ヲ否トスル者ト定ム可シ但シ犯罪ヲ宥免ス可キ模様期滿免除被告人ノ幼年等ニ管スル問ニ付テハ格別ナリトス
一箇ノ問ニ答ヘタル毎ニ陪審ノ長其決定ノ

旨ヲ書面ニ記シテ之ヲ証ス可シ
陪審ノ全員中七名以上可トスル時ハ全員ハ
半ハ以上ニテ然リトスト記ス可シ
又全員ノ七名以上否トスル時ハ全員ハ半ハ
ト云ヘレ語ヲ記スル丁ナク只否ト記ス可シ
此条ノ第一項ニ記シタル三箇ノ場合ニ於テ
ハ否トスル答ニ定マリタル時ノ否トス
者全員ノ半ハ以上タル旨ヲ記ス可シ

第二百三十五條 陪審ノ長ハ決定書ノ末ニ姓
名ヲ手署シ且ツ其各葉ニ姓名ノ手署ニ代用
スル横線ヲ畫ス可シ

第二百三十六條 陪審ノ決定ヲ為シ終リタル
後被告人ヲ遠サケテ更ニ裁判席ヲ閱ク可シ

第二百三十七條 陪審ノ長ハ陪審ノ答書ヲ讀
上ク可シ

第二百三十八條 若シ陪審ノ問題ニ答ヘサル
時又ハ其答ノ中ニ此彼齟齬シタル丁アル時
又ハ決定書ニ陪審答書ノ姓名ノ手署或ハ全
員ノ半ハ以上云々ト記ス可キニ若シ過テ記
セサル丁ヲ其文面ニ就キ知リ得可キ時ハ裁
判所ニ於テ其公務ニ因リ又ハ檢察官ノ求メ
或ハ代言人ノ求メニ因リ陪審ヲシテ更ニ再
度別室ニ退キ前ニ記スル錯誤ヲ改メシム可
シ
陪審其答ヲ可キ問題ニ答ヘサル時ノ外ハ問
題ノ本案ヲ更ニ再議スルニ及ハス

第二百三十九條 裁判所長ハ裁判席ニ於テ書記官ト共ニ陪審ノ答書ニ姓名ヲ手署ス可シ
第二百四十條 然レ後被告人ヲ裁判席ニ呼出シ陪審ノ決定書ヲ讀取カス可シ

第二百四十一條 陪審ノ答否ナリト云フ時ハ裁判所ニ於テ被告人ノ無罪タル旨ヲ言渡シ且ツ之ヲ釋放ス可キ旨ヲ言渡ス可シ但シ他ニ原因アリテ拘留セラレタル時ハ格別タル可ク且ツ其旨ヲ拘留場ノ書記局ニ告知シテ囚徒姓名簿ニモ其旨ヲ記シ置ク可シ

第二百四十二條 陪審被告人ニ罪アリト答フル時ハ檢察官ヨリ刑律適用ノ旨ヲ裁判所ニ求ム可シ

第二百四十三條 被告人及ビ其代理人ハ法律適用ノ事ノミニ付キ其意ヲ申立ルコトヲ得可シ

第二百四十四條 若シ陪審ノ確的ナリト答ヘタル事柄ノ法律上ニテ重罪、輕罪、註誤ト為ス者ニ非サル時ハ裁判所ヨリ被告人ヲ免ルルス旨ヲ言渡シ且ツ之ヲ釋放ス可キ旨ヲ言渡ス可シ

第二百四十五條 若シ然ラサル時ハ縱令重罪裁判所ニ於テ裁決ス可キ重罪ニ非ストモ其裁判所ニ於テ法律ヲ適用シ裁判ヲ言渡ス可シ

第二百四十六條 被告人ニ刑ヲ言渡シタル時

又ハ之ヲ無罪ナリト言渡シタル時ハ重罪裁
判所ニ於テ嘗テ最初ノ証人ヲ問糺ス前ニ申
出テタル民事原告人ノ申立ニ付キ終審ノ裁
判ヲ為ス可シ但シ其申立書ハ陪審ノ決定書
ヨリ前ニ之ヲ差出ス可ク其後ニ至テハ其申
立タル金高ヲ更ニ増ス可カラス

第二百四十七條 民事原告人ノ求ムル損失償
高ノ討論ハ刑事ノ裁判定マリタル後ニ之ヲ
為ス可ク若シ他ノ犯罪訴訟ヲ急ニ裁判ス可
キ時ハ重罪裁判所會議ノ末ニ之ヲ延ハス可
シ

第二百四十八條 一旦犯罪訴訟ノ吟味手續ニ
取掛リタル上ハ陪審ノ闖引ヨリ刑ノ言渡ニ

至ル迄ノ間裁判所及ヒ陪審ハ他ノ犯罪訴訟
ノ吟味ニ取掛ル可カラス

第四款 重罪裁判所ノ言渡ヲ取消

第二百四十九條 陪審ノ決定ハ如何ナル方法
ヲ問ハス之ヲ取消サント訴フ可カラス

第二百五十條 檢察官及ヒ被告人ハ左ノ場合
ニ於テハ重罪裁判所ノ裁判言渡ヲ取消サン
ト訴フルコトヲ得可シ但シ之レカ為メニハ第
百五十四條ニ記シタル法式ニ循フ可シ

第一 陪審ノ確的ナリト答ヘタル事柄ノ
重罪輕罪註誤ニ非ナル時

第二 裁判所ニ於テ法律ノ適用ヲ誤リタ

ル時

第三 陪審ノ圖引ヨリ後ノ手續ニ緊要ナル法式ヲ缺キタル時

第二百五十一条 前條ニ記スル裁判言渡取消ノ訴ハ控訴裁判所ニ之ヲ為ス可シ但シ其裁判所ノ裁判後ハ重罪裁判所ノ席ニ列ナリシ者タル可カラス

第二百五十二条 控訴裁判所ニ於テハ其訴ヲ吟味シタル上ニテ尤ノ如ク処置ス可シ

第二百五十三条 第一ニ記シタル場合ニ於テハ被告人ヲ宥恕ス可シ

第二百三十三條ニ記シタル場合ニ於テハ呼出状ヲ送達セシ以來ノ訴訟手續ヲ取消シ被告人ヲ

更ニ他ノ重罪裁判所ニ移ス可シ

然レモ第二百五十條ニ於テ重罪裁判所ノ言渡

シタル刑、當然適用ス可キ刑ヨリ更ニ重カラ

サル時ハ重罪裁判所ノ裁判言渡ヲ取消ス可

カラス

第二百五十三條 重罪裁判所ノ裁判言渡書ハ

控訴裁判所ノ規則書ニ定メタル場所ニ貼附

シテ之ヲ公ケニ為シ又其特定ノ場所アラサ

ル時ハ各裁判所ニ裁判言渡書ヲ貼附スル為

メ設ケタル懸帖ト州廳ノ門ト犯罪ノ地ノ官

署ノ門トニ之ヲ貼附シテ公ケニ為ス可シ

重罪裁判所ノ裁判言渡ハ檢察官ノ求メニ因

リ之ヲ執行フ可シ

第五款 重罪裁判所ニ於テ被告人

抗傳ノ俟刑ヲ言渡ス事

第二百五十四条 若シ重罪ノ被告人ヲ逮捕スルヲ得ス又ハ之ヲ逮捕セシ後ニ其逃亡シタル時裁判席ヲ閉ク前ニ其被告人自訴セサルニ於テハ重罪裁判所ニ於テ犯罪訴訟ノ書状ヲ取調タル上ニテ抗傳ノ俟刑ヲ言渡ス可シ

第二百五十五条 重罪裁判所ニ於テハ陪審ノ立會ナク抗傳ノ俟刑ヲ言渡ス可シ

第二百五十六条 逮捕スルヲ得ス又ハ逃亡セシ被告人ヲ呼出ス為メ裁判席ヲ閉クヨリ八日前ニ第二百五十二条ニ記シタル場合ニ貼附ヲ為シ且ツ新聞紙ニ記入シテ其出席ス可

キ旨ヲ公告ス可シ

第二百五十七条 抗傳セシ被告人ノ出席セサル

ル理由ヲ弁解スル為メ外何人ニ限ラズ其

被告人ノ名代トナリテ出席スルヲ許ルサス

重罪裁判所ニ於テ其弁解ノ旨ヲ稟届クル時

ハ裁判言渡ノ期日ヲ延ハシ被告人ノ出席ス

可キ期限ヲ定メ且ツ後条ニ記スル財産ノ附

託ヲ釋放ス可シ

第二百五十八條 下等裁判所ニ於テ抗傳セシ

被告人ノ犯罪訴訟ヲ重罪裁判所ニ移ス時ハ

被告人ノ財産受託者ヲ任ス可シ

被告人ニ對シ為ス可キ諸般ノ告訴ハ皆此財

産受託者ニ對シ之ヲ為ス可シ但シ其被告人

自訴ニテ其抗傳ノ咎ヲ免レ且ツ其財産附託
ノ釋放ヲ得タル時ハ格別ナリトス
前項ノ場合ノ外ハ被告人ノ死去シ又ハ其刑
ノ期滿免除ノ期ニ至ル迄ハ其財産附託ヲ繼
續シ置ク可シ

第二百五十九條 若シ抗傳シテ刑ノ言渡ヲ受
ケタル者自訴シ又ハ其刑ノ期滿免除ノ期ニ
至ラサル前ニ逮捕セラレシ時ハ抗傳ノ俟ノ
裁判言渡ヲ当然取消シ重罪裁判所ニ於テ其
犯罪訴訟ヲ吟味ス可シ

第二百六十條 如何ナル場合ニ於テモ一箇ノ
事柄ニ付キ犯罪ノ告訴ヲ受ケタル被告人數
名中ノ一人抗傳スト虽モ餘人ニ付テハ其告

訴ノ裁判ヲ延ハス可カラズ但シ裁判所ニ於
テ檢察官ノ申立ヲ聽キ其告訴ノ裁判ヲ次ノ
會議ニ延ハス可シト思フ時ハ其旨ヲ言渡ス
可ク又當時ノ會議終ラサル中ニ其抗傳セシ
被告人ヲ逮捕シ得可ク或ハ其自訴ス可キヲ
思料スル時ハ其告訴ノ裁判ヲ當時ノ會議ノ
未迄延ハス可シ

第四章 各種ノ刑法裁判所ニ通スル
規則

第二百六十一條 裁判席ヲ開ク前ニ裁判所又
ハ相手方ノ緊要ナル手續ヲ怠リシ旨ヲ申立
シトスル者ハ最終ノ証人ヲ問亂ス前ニ之ヲ
申立テ又証人ヲ問亂スコトナキ時ハ双方弁論

ノ始マラザル前ニ之ヲ申立ツ可ク若シ其定期ヲ過コス時ハ其申立ヲ為スノ權ヲ失フ可シ
犯罪訴訟ヲ此裁判所ヨリ彼ノ裁判所ニ移ス言渡ハ本案ヲ裁判ス可キ裁判所ニ其取消ヲ訴フ可カラズ但シ此規則ト被告人其訴ヘラレシ事柄ノ法律上ニ於テ罰セラル、モノニ非サルコトヲ弁スルノ權ト相觸ル、コトナカル可シ

第二百六十二條 抗傳シテ刑ノ言渡ヲ受ケル者ハ後ニ自訴シテ其無罪タル言渡ヲ得ルトモ吟味手續ノ費用及ビ其抗傳シテ受ケタル裁判言渡ノ費用ハ之ヲ償フ可キノ言渡ヲ

受ク可シ

第二百六十三條 裁判所ニ於テ既ニ甲者ノ知刑ヲ言渡シタル後乙者之ト同一ノ犯罪訴訟ヲ受ケ亦其刑ヲ言渡サレ此二箇ノ言渡相抵觸シテ二人中一方ハ必ス無罪タルノ明カナルニ於テハ此二箇ノ裁判言渡ノ執行ヲ停止ス可シ○檢察官及ビ右ノ二人ハ何時ニ限ラズ控訴裁判所ニ其二箇ノ裁判言渡ヲ取消シ是レ迄ト異ナリタル裁判所ニ於テ其吟味ヲ受ク可キ旨ヲ訴フルコトヲ得可シ
若シ右二人中ノ一人既ニ死去シタル時ハ控訴裁判所ヨリ其死後ノ代人ヲ任シ論弁ヲ為サシム可シ

第二百六十四條 又人ヲ殺スノ罪アリト訴ヘ
ラレシ者其死刑ヲ言渡サレタル後其殺サレ
タリト云ヘル本人ノ現ニ生存シ又ハ其告訴
ノ証人偽証ノ罪ヲ以テ刑ヲ言渡サレタル時
ハ亦前條ノ如ク控訴裁判所ニ控訴ヲ為ス
ヲ得可シ但シ証人偽証ノ罪アル時ハ控訴裁
判所ニ於テ以前ノ裁判役其偽証ノ為ニ迷誤
ヲ生シタルヤ否ヲ思料シ其迷誤アリト思フ
時ハ右ノ控訴ヲ取上ク可シ
第二百六十五條 犯罪被告人ハ何時ニ限ラズ
裁判所ヨリ其代言人ヲ指定メント求ムル
ヲ得可シ但シ其代言人ハ裁判所長之ヲ指定
ス可シ

第二百六十六條 裁判所ニ於テ犯シタル輕罪
及シ註誤ハ其裁判所ニ於テ之ヲ裁判シ得可
キ権限内ノモノタレハ第二百四十九條^{此條}
ノ誤ナラズ規則ニ管ヤス直チニ其席ニ於
テ之ヲ裁判ス可シ
若シ裁判所ニ於テ重罪ヲ犯シタル時又ハ前
項ノ場合ニ於テ裁判所ニ其犯罪ヲ裁判ス可
キ権ノアラサレ時ハ其犯罪ノ吟味ヲ檢事局
ニ移ス可シ
如何ナル場合ニ於テモ裁判所長其犯罪ノ調
書ヲ記シ書記官之ニ姓名ヲ手署ス可シ又犯
人ヲ逮捕ス可キ模様アル時ハ之ヲ捕ヘテ拘
留ス可シ

第二百六十七條 犯罪被告人ノ為メ民事上ノ
償ヲ擔當ス可キ者ハ其被告人ト同期限内ニ
之ヲ呼出ス可シ

右ノ者ハ民事原告人又ハ官府ニ對シテ裁判
所費用ヲ償フ可ク又民事原告人ニ損害ノ償
ヲ為ス可シ但シ罰金ハ之ヲ言渡サルコトナ
カレ可シ

第二百六十八條 民法裁判所又ハ商法裁判所
ニ訴ヲ為ス者ハ其事ニ付キ亦民事原告人ト
ナリテ刑法裁判所ニ訴出ス可カラズ
民事原告人ハ下吟味掛リ裁判役又ハ裁判所
長ノ見積ニ從ヒ裁判費用高ヲ裁判所ニ預ク
可シ

吟味手續ヲ為ス間ニ追加ス可キ裁判費用高
モ亦之ヲ預ク可ク且ツ之ヲ見積ル法方モ亦

前項ト同一タル可シ○重罪裁判所ニ於テ裁
判ヲ為シタル時ノ外ハ民事原告人ノ求ムル
損失償高ニ付テハ裁判言渡ヲ訴訟法ニ記ス
ル期限内ニ控訴スルヲ得可ク又其控訴ハ訴
訟法ニ定メタル裁判所ニ之ヲ為ス可シ

第二百六十九條 裁判席ニ於テ生ズル附帶ノ
訴ハ檢察官ノ申立ヲ聽キタル上簡約ノ法式
ヲ以テ至急ニ之ヲ裁判ス可シ

第二百七十条 若シ掛リ裁判役兩名又ハ裁判
所兩箇ニテ一箇ノ犯罪訴訟ヲ吟味シ未タ其
中ノ一方ニ定ム可キノ言渡アラサル時ハ双

方ノ中先キニ手續ヲ為ス者ヨリ控訴裁判所
ニ願出シ此裁判所ニ於テ其訴訟ヲ右裁判所
兩名又ハ裁判所兩箇中ノ一ニ任カス可キ丁
ヲ定メ之ニ証書類ヲ送達セシム可シ

第五章 期滿免除ノ事

第二百七十一條 重罪ノ處刑ハ其言渡ノ時ヨ
リ「アラバ」曆十ケ年ヲ以テ期滿免除ノ期限
トス

第二百七十二條 輕罪ノ處刑ハ其期滿免除ノ
期限ヲ三ケ年トス

第二百七十三條 註誤ノ知刑ハ其期滿免除ノ
期限ヲ一ケ年トス但シ控訴又ハ故障申立ヲ
為ス可キ時ハ裁判言渡ノ確定セシ日ヨリ其

期限ヲ算ス可シ

第二百七十四條 刑事ノ訴ハ重罪ニ付テハ其
犯罪ノ日又ハ最終ノ下吟味手續ノ日ヨリ五
ケ年ヲ以テ期滿免除ノ期限トシ又輕罪ニ付
テハ三ケ年、註誤ニ付テハ六ケ月ヲ以テ右ノ
期限トス

第二百七十五條 下吟味ノ手續ヲ為ス時ハ前
條ニ記スル期滿免除ノ期限ハ經過ヲ停止ス
可ク縱令其手續ニ管セサル者ニ付テモ亦同
一タル可シ

第二百七十六條 知刑ノ期滿免除ノ期限ニ至
ル時ハ其處刑ノ裁判言渡ヲ確定ノモノト為
ス可シ

第二百七十七條

重罪、輕罪、誣誤ニ付キ損失ノ

償ヲ得ント求ムル民事ノ訴ハ既ニ刑事ノ訴

ノ期滿免除ノ期限ニ至ルニ後ハ刑法裁判所

ニ之ヲ為スコヲ許ルサス

又未タ刑事ノ訴ノ期滿免除ノ期限ニ至ラサ

ル前ニ民事ノ訴ヲ為ス時ハ刑事ノ訴ノ期滿

免除ノ期限ノ經過ヲ停止ス可シ

埃及書 治罪法草案 終

司
法
省



司
刑
課

